

エネルギー白書から シリーズ「我が国が抱える構造的問題」

8 石油、天然ガス、石炭の可採埋蔵量

石油、天然ガス、石炭の確認可採埋蔵量、可採年数

	確認可採埋蔵量	可採年数
石油	1.7兆バレル	53年
天然ガス	187兆立方メートル	56年
石炭	8,609億トン	109年

(注) 確認可採埋蔵量：存在が確認され、経済的にも生産され得ると推定されるもの。

可採年数：確認可採埋蔵量をその年の生産量で除したもの。

出典：BP統計を基に作成

石油、天然ガス、石炭の埋蔵量をみると、2000年代後半から、北米のシェール革命を始めとする非在来型資源^(注)の開発の進展等により増加傾向にあります。しかしながら、化石燃料は有限であるため、エネルギー需要が拡大する中国やインド等の新興国は、国営企業による資源獲得を積極化させており、新興国の企業群も交えた激しい資源の獲得競争が世界各地で繰り広げられるようになっています。

(注) 非在来型資源：従来とは異なる方法で生産される、「シェールガス」、「オイルサンド」、「メタンハイドレート」を始めとする石油・天然ガス等の資源。

> 参考HP：日本のエネルギー事情のいま、をお伝えします

http://www.fepc.or.jp/theme/now_energy/japan_energy_01.html

出典：資源エネルギー庁「平成25年度エネルギーに関する年次報告」(エネルギー白書)